



ZENSOUSEI 21th

平成11年6月8日第三種郵便許可(年4回2・5・8・11月の10日発行) そうせい第176号平成29年2月発行

SOUSEI

2017.2 No.176

〔特集1〕

東日本大震災から生まれた歩み

臨床宗教師

〔特集2〕

東日本大震災から6年

〈現地の今、活動者の思い〉



東日本大震災から生まれた歩み

臨床宗教師

interview

平

成23年3月11日。あまりにも多くのものを奪い、深い傷痕を残したあの日からまもなく七回忌を迎えようとしています。これまで多くの青年僧侶が現地に赴き、瓦礫撤去や泥のかき出し、また避難所や仮設住宅での行茶を通じた傾聴活動という物心両面による支援活動に尽くしてきました。

今、それらの活動の中から宗教者の一つの在り方が「臨床宗教師」という形となり、昨年には上智大学島園進教授を会長に日本臨床宗教師会が設立されるといふ確かな歩みを進めています。

被災者支援から超高齢多死社会へ向けた社会運動への展開を見せる臨床宗教師の実態に迫るべく、養成講座が開催されている東北大学に向かい、臨床宗教師として緩和ケア病棟やホームホスピスで活動されているお二人の青年僧侶にお話を伺いました。

公共空間で心のケアを提供する宗教者

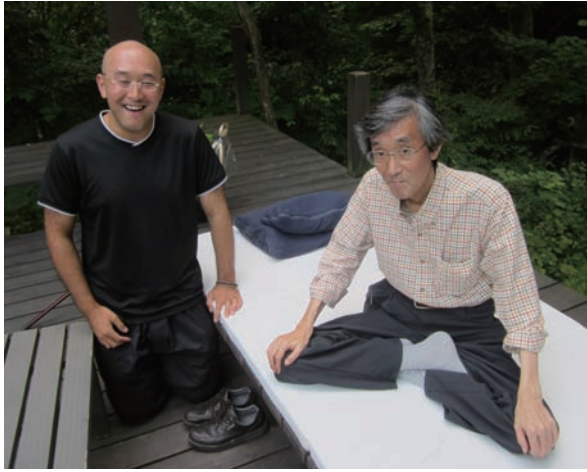
「臨床宗教師」とは

「臨床宗教師 (interfaith chaplain)」とは、被災地や医療機関、福祉施設などの公共空間で心のケアを提供する宗教者です。「臨床宗教師」という言葉は、欧米の聖職者チャプレンに対応する日本語として、岡部健医師が2012年に提唱しました。「臨床宗教師」は、布教・伝道を目的とせず、相手の価値観、人生観、信仰を尊重しながら、宗教者としての経験を活かして、苦悩や悲嘆を抱える人びとに寄り添います。さまざまな専門職とチームを組み、宗教者として全存在をかけて、人びとの苦悩や悲嘆に向きあい、かけがえない物語をあるがまま受けとめ、そこから感じ取られるケア対象者の宗教性を尊重し、「スピリチュアルケア」と「宗教的ケア」を行います。

『日本臨床宗教師会 設立趣意書』より

宮城県栗原市普門寺副住職
高橋悦堂師

宮城県栗原市通大寺徒弟
金田諦晃師



—なぜ臨床宗教師を目指されたのですか？

高橋師／曹洞宗総合研究センターや大学院を終え、故郷に戻ってきた10ヶ月後に東日本大震災が起こりました。栗原市の火葬場には津波で亡くなられた方のご遺体が次々と来られました。当時の被災地では、ほとんどの方が菩提寺の住職と連絡がつかない状況でしたので、栗原市の僧侶が火葬場で読経供養させていただくことになりました。私はこの時の経験が大きくて、小学5年生の女の子を津波で亡くしたお父さんから「和尚さんに拜んでもらえて安心しました」という言葉をいただいた時、僧侶として生きる決心ができました。

その後、金田諦應老師から「カフェ・デ・モンク」という宗教者による被災地移動傾

聴喫茶を始める際に声をかけていただきました。被災地で苦悩する人びとの声を聴き、宗教者も共に悶え苦しむのです(モンクとは悶苦・文句・英語のMONT「僧侶」の3つを表している)。そして、宮城県内で在宅緩和ケア(主に終末期がん患者さんの家での看取りなどに関わる)に取り組んでいた故岡部健医師と出会います。金田老師と岡部医師という強いエネルギーを持った二人の作る大きな渦に巻き込まれる形で、臨床宗教師の道へ踏み出しました。現在は在宅緩和ケアの診療所や介護福祉施設などで活動しております。

金田師／大学3年生の時に震災が起きて、師匠(カフェ・デ・モンク主宰、金田諦應老師)から戻ってくるように言われたのです。「栗原の火葬場にご遺体が沢山運ばれてくるから、お前はお経が読めないけれどその姿を見ていなさい」ということでした。

その時のお坊さんたちの一生懸命な姿をずっと見ていた時に、自分の中で「生きるとは何なのだろう」「僧侶として自分はどうやって生きていかなければならないのだろう」ということを考えていくようになりました。

臨床宗教師研修が終わってそのまま大病院の緩和ケア病棟にボランティアとして参加し、昨年からは雇用していただき週に2日活動しています。

—認定を受けた後はどのようにして活動場所を確保されるのでしょうか？

高橋師／協力的な医療者や介護福祉関係者などが増えています。地域との関係を重視している所は、地元の僧侶との連携に関心があるのですが、「和尚さんって敷居が高く」と語る人も多いですね。私は岡部先生とご縁から岡部医院さんで活動を始めました。その後、臨床宗教師として講演などを行う中で、話を聞かれていた医療や介護福祉分野の方がたとご縁が繋がってという経緯です。

—お二人が現場で心がけていることはありますか？

高橋師／普通でいることです。私は元氣な人、あなたは亡くなる人という視点から離れること。どんな状況でも人間は対等であるということ。その時、自分は僧侶だと身構えることはあまりありません。

曹洞宗門の表現でいうならば、仏が仏と向き合うという心でしょうか…。

金田師／現場にいる時と、いない時の意識の違いを作らないことを心がけています。現場に入る時に意識のスイッチを変えていけると、それがストレスになり、続けていけなくなると思います。

この活動を始めてから、私は「二人の人間の人生や命が本人の意志を越えた働きや、多くの出会いによって形作られていくのだ」ということを思うようになりました。私自身も出会いから学ばせていただき、それを伝えることも宗教者としての役割であろう。

そういう信念が強くなる中で、一つ一つの出会いや関わりを大切にしようという心構えが出来てきたように思います。

—心に残る経験を教えてください

高橋師／在宅緩和ケアを受けていた女性から「私の病気が治るように祈ってください」と言われた時、祈れなかった経験があります。突然の死の通告、実母を残し逝かねばならない、様々な苦悩の中にあつたその方の願いに対して、自分が祈ったとしてこの方の癌が治るのだろうか…：…そんな思いが生じ、悶悶として祈れませんでした。それから一週間後、その方は急変し亡くなられ、自分は何をすべきだったのか、全く分からなくなりました。その後、ある医師に「ただひたすらに治るようにと祈れば良かったのです。治るか治らないかではなく、僧侶なら諸法実相の中に祈りを投げ出しなさい」と言われ、霧が晴れた様な経験があります。

金田師／ボランティアの時は最初からお坊さんに好意的な印象を持たれている方との交流が多かったのですが、雇用されてからは、ある家族の方に初めて宗教者として嫌がられ、この場にいなくてくださいと言われる経験をしました。

ある女性は、私は他人のことを顧みないで自分中心で生きてきた、今は孤独ですとお話しされました。良い思い出や自分の生きてきた意味を探り出そうという傾向

が見えてきたかなという時、その日の夕方「綺麗な夕焼けですね」と声をかけたところ、振り返らずに「物悲しい景色だね」と言われました。計り知れない孤独感に思いを致せない自分、寄り添う姿勢というものを考えさせていただいています。

—新しい活動ということで注目されるがゆえに、臨床宗教師には様ざまな意見が向けられていると思いますが

高橋師／臨床宗教師が制度化してしまうと、臨床宗教師認定のない宗教者は公共の場での活動から切り離されるのではという危惧があります。それは宗教における大損失です。

宗教が人の心に寄り添う形は様々です。例えばグライ・ラマ法王、ローマ法王、両大本山の禅師様などは、ごなたも直接に医療の現場に関わるわけではありませんが、その方の存在自体が病床の人の心の拠り所となる事があります。そういう視点も大事で、臨床宗教師が宗教のダイナミックな力を制限することになってはいけません。

—お二方共に肩書きにとらわれない活動が心がけているそうですね

高橋師／臨床宗教師という名前が大事なわけではないのです。信心を持つ宗教者が、それを元に悩み苦しむ人とどう向き合っていくかが大事なのであって、臨床宗教師は

その現代的な形の一つだと思っています。「臨床宗教師的活動をしなくては宗教者ではない」という風潮になっては逆に困ります。

金田師／私は病棟で「臨床宗教師です」と言ったことはほぼありません。自分の居場所ができた、自分が何かをしてあげたんだと嬉しくなってしまう瞬間に、「そういうことのためにやっているのではないのだ」と自分をしっかり見つめるようにしています。

—研修を受けなくても、仏の教えで救うことができると仰る方もありますが

高橋師／それはもっともなことで、僧侶として、そうした確固たる信念がなければ例えば葬儀の導師などを務めることはできないと思います。

檀信徒さんに対し僧侶として関わるのなからそれでいいのですが、病院などの公共の場では目の前の方が檀信徒さんではなく、仏教徒でもないかも知れません。それゆえに、公共の場に出るならば、相手の信仰や価値観を尊重することが何より必要なのです。

—心境の変化などはありましたか？

高橋師／ご葬儀に関わる時の思いが変わりました。目の前にある遺骨、お写真、お位牌はその方の人生と命を含んだものであることを強く感じます。引導を渡すことの認識など、以前とは全く異なって感じます。

金田師／闘病の末に奥さんを見送られた方が、火葬後の遺骨を見て「人間、骨になったらゴミだな」と仰っていました。一生懸命にお世話をしてきた大切な人があつという間に形を変えてしまい、とても虚しかったのだと思います。そのようなやりきれない思いを抱かれています方に寄り添い、遺骨に対しても敬意を払って、丁寧に接する僧侶の姿は意味のあることだと、またご葬儀に至るまでご家族の思いを想像する力が芽生えてきたと、この活動を通じて教えていただいております。そして、お経に込める気持ち、合掌する気持ちも変わってきていると感じます。

高橋師／最近では病院以上に、介護福祉施設の方から「うちにも来てほしい」と頼まれます。今後は高齢の方の介護施設も、看取りの場としての役割をより一層担うことになりそうです。臨床宗教師でなくてもいいから、和尚さんに法話をしに来ていただきたい、看取りをする職員にも関わって欲しいという話もあります。

宗教勧誘をしない、自分の信心を押し付けられない事などに気をつけながら、檀務と折り合いをつけ関わることも出来るかも知れません。このことを青年僧と共有し、次の世代に伝えていけたらと願っています。

—本日はありがとうございました

誕生の経緯、現在の動向

東アジアへの広がり

東日本大震災を機に、医師・看護師らによる心のケアと共に、宗教者による被災地支援活動が展開したことを承けて、平成24年から東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座で理論教育と臨床実習を組み合わせた研修が始まり、その後、龍谷大学、鶴見大学、高野山大学、武蔵野大学、種智院大学等の大学機関もこれに取り組んでいます（鶴見大学の講座は總持寺の安居者を対象としており、現段階では実習と実習指導を組み込んでいないものです。また、愛知学院大学が平成29年度から曹洞宗僧侶限定で実習と実習指導を組み込んだ本格的な養成講座を開設することです）。

将来的には新しい専門職として心のケアを実践するために、資格認定制度を確立することを視野にいられています。

研修内容

東北大学大学院での研修は3ヶ月間の座学と実習で修了となり、その後はフォローアップ研修で学びを継続します。遠方からでも受講できる日程で組まれているため、全国から受講者が集まっていることに驚かされました。すでに152人の宗教者が研修を修了しています。

曹山寶積寺が視察に来日

中国・江西省の曹山寶積寺の住持である養立法師が導入を検討されており、東北大学の鈴木岩弓教授を自坊へ招き講演会を開く一方で、平成28年12月には現場視察のため来日されています。

臨床の宗教

宮城県 通大寺住職 金田諦應



東

日本を襲ったマグニチュード9.0の巨大地震。その後の大津波。そしてその夜、被災地を覆った満天の星空。宇宙は「生と死」「喜怒哀楽」そして「貴方と私」の區別を全て包み込み、美しくそして悲しく輝いていた。真理の一端が落ちて来たのを感じる。

四十九日の追悼行脚。破壊された海辺を歩く。経文はやがて叫びに変わり、牧師は歌う讚美歌が見つからない。学んできた教義・教理を喪失する。

生とは！死とは！答えのない問いが突きつけられる。それは今まで学んできたあらゆる宗教言語を拒絶する凄みがあった。泥の中、神仏の言葉を探しながら歩いた日。そして一年後、四十九日と同じ海岸に立って感じた再生の風。「色即是空・空即是色」が回転を始め、諸法のありのままの姿を受け入れている自分がいた。それはまさに信仰の、崩壊と再生の物語だった。

私たちの活動目的の一つ。破壊され、凍り付いた時間と空間を再び繋ぎ合わせ、未来への物語を共に紡ぐ事。それぞれの物語

が動き出すまでじっと待つ。宗教者には物語が展開していく「場」の創造、その「場」に留まり続ける「耐性」、そして、個人の人生に添って創造される物語を受け止める、レンジの広さが要求された。

悟りや救いを饒舌に説く事は宗教・宗派の教義の自己満足になっても、一人一人の救いにはならない。宗教・宗派的な文脈で語られる「救い」ではなく、その人の物語の文脈で語られる「救い」が自然に落ちてくるまでじっと待つ事が求められたのだ。

被災地で活動する私たちの姿を、癌を患い、己の死と向き合いながら見つめていた医師がいた。故岡部健医師だ。彼は、看取りの現場から立ち上がってくる多様な「物語」と向き合ってきた。やがてそれは臨床宗教師育成の想いへと向かっていく。

「宗教者は看取りの負のエネルギーを祈りの力で自然界に分散する力を、持っている」彼は東北という精神風土で了解された宗教者の役割に気付き、終末期医療現場での宗教者との協働を発想する。「臨床宗教師」という専門職養成を提案し、翌年、他界。想いは私たちに引き継がれた。

「臨床宗教師」とは、公共空間で、布教や伝道を目的とせず、相手の価値観を尊重しながら、宗教者としての経験をいかして、苦難や悲嘆を抱える方がたに寄り添う宗教者である。

養成プログラムは、苦悩の背景にある歴史・社会・文化・風土への洞察、臨床宗教師の守るべき倫理綱領、他の宗教・宗派、

医療・福祉関係の機関との協働の仕方、等を学びつつ、現場での実習を行う。座学と現場を往復しながら傾聴力・ケアスキルを深めていく。

臨床宗教師の活動は「自他」の境界線を越える作業である。「場」は悲しみを引き寄せる「磁場」となり、そして「慈場」へと変化する。しかし「慈場」は同時に「悲場」なのだ。「慈悲」は厳しい言葉。切に他を想う心は、同じ強さで己に返る。そこから「覚悟」が問われ、その覚悟を支える「戒律」が命の奥から湧き起こる。揺れ動く現場からは、常に自己の信仰が問われ続けるのだ。信仰は、問いと答えが循環する事によって深まっていく。これが臨床に於ける宗教者の姿であり、臨床宗教師の最も肝心な部分である。

釈尊の「四門出遊」は、「自」よりも「他」への問いであった。全ての始まりは「慈」である。「慈」は全ての修行を回転させる力。私たちは正身端座する時、眼前に広がる苦悩の世界を感じ取る「感性」を養わなければならない。

衆生は無辺であり、そして無尽の苦しみを抱えながら生き続ける。私たち宗教者は、常に現場から立ち上がってくる言葉に耳を傾け、応答しなければならぬのだ。宗教者には安全な場所はない。宗教者には風がよく似合うのだ。

間もなく6回目その日がやって来る。あの時見上げた満天の星空に想いをはせる。あの出来事は一体何だったのだろうか。今でもその意味を問い続けている。

終末期の現場から

臨床宗教師の果たす役割

上尾中央総合病院緩和ケア病棟看護科長 大島英子

上尾中央総合病院は埼玉県上尾市にあり724床を有する埼玉県がん診療指定病院です。その中の緩和ケア病棟は2014年に厚生労働省の認可を受け運営しています。緩和ケア病棟は治癒が難しいがん終末期にある患者さんの辛い症状を和らげ、その人らしい療養を支援する専門の病棟です。緩和ケアの共通要素としては、患者と家族を一単位として双方にケアを提供すること、身体的、精神的、社会的、実存的なニーズへの対応を図ること、家族・遺族に対して悲嘆・死別のサポートを行うことを挙げています。そしてこれらの対応は多職種でチームを組んで行います。例えば身体的な苦痛がある場合は医師や看護師が対応し、薬剤師の調整には薬剤師が、食事の工夫には管理栄養士が、気持ちがつらい場合は心理士が、実存的苦痛、葬儀やお墓のことには臨床宗教師が関わります。このように多職種でアプローチすることによって、患者・家族に質の高いケアを提供する可能性が広がります。



臨床宗教師の活動状況

当院では現在で9人の臨床宗教師のボランティア受け入れを行っています。その宗派の内訳は曹洞宗2人、真言宗3人、浄土真宗系1人、日蓮宗1人、天理教1人、臨濟宗1人です。このように複数の臨床宗教師の受け入れをしている医療機関は国内でも例のないことです。布教や伝道を目的とせず超宗派で宗教間協力をを行い、しかも公共性がある臨床宗教師の存在は緩和ケアを提供する場では大変貴重なのです。

「そらカフェ」での傾聴活動

緩和ケア病棟における臨床宗教師の主な活動は、患者さん・家族に対するところのケアの一貫として月に1回開催する傾聴カフェ「そらカフェ」があります。この活動は様ざまな背景をもつ患者さん・家族に対して、よりきめ細やかな対応が図れるよう、臨床宗教師と医療チーム、ボランティアが協働して提供できる企画とし誕生しました。

そらカフェの由来は、最上階(13階)にあるラウンジから見える空がどこまでも広く続ききれいであったこと、雨の日も風の日も曇りの日も晴れの日も空があるように、辛いときも悲しいときも苦しいときも楽しいときも、私たちは患者さん・家族と共にいてここに寄り添うことが出来たらという願いを込めて名付けました。ある時はハーブ演奏ボランティアと協働で開催しました。

ハーブ演奏をBGMにティーサービスの準備を始め、注文をいただいた珈琲や紅茶

かき氷を臨床宗教師に病室に届けていただきました。また、ラウンジにお越し下さった患者さんや家族の傍らで演奏を一緒に聴き、辛い気持ちに耳を傾けていただきました。ある会話が出来ない患者さんは臨床宗教師が関わる中で自然と手を合わせ祈りの時を持たれた光景もありました。またある時は、宗教資源を活用したケアとして数珠プレスレット作りをしました。ある患者さんは後に残すお子様たちのために、数珠プレスレットを作り、臨床宗教師に念入れをしていただきました。この数珠プレスレ

トは葬儀の時に大切な形見としてお子様たちの腕にあつたそうです。また、ケーキバイキングを管理栄養士と協働で開催したこともあります。患者さんはたくさん召し上がることは出来ませんが、一口サイズの色とりどりのケーキを選ぶ楽しみ、味わう楽しみ、共に集う楽しさを感じていただきました。

日本型チャプレンを目指して

がん終末期の患者さんは死を目の前にして、たくさんの痛みや苦しみ、実存的な苦

悩を抱えています。また家族も大切な家族を失う悲嘆があります。臨床宗教師は死を越えた先を見つめつつ、目の前の患者さんにご家族のこころの声を澄まし、こころに寄り添って下さいます。緩和ケア在宅医療であった故岡部健医師の言葉にあるように、「人が死に向かい合う現場で、医療者とチームを組んで入れる日本人の宗教性にふさわしい日本型チャプレン(※)のような宗教者が必要」だと私も実感しています。楽しみや遊びの場所を取り入れながら、くつろげる場を提供することもそらカフェが大切したいコンセプトです。当院の臨床宗教師の活動が医療チームとボランティアが協働して医療機関・地域でこころのケアを提供する実践モデルとして、今後更に経験を重ね洗練していきたいと思えます。

全国の青年僧侶の皆さまへ

日本は高齢多死社会を迎える中で人は生命と死と向き合う機会が益々増えます。医療・介護・福祉の場では臨床宗教師をチームの一員として迎えたいニーズが高まってくと思われれます。アウェイの場での活動は勇気があることもあるでしょう。でもそれ以上に大切なことを体験出来ると思います。今後一人でも多くの臨床宗教師が誕生し社会に貢献されますことを心から期待しております。

※：チャプレンとは教会や寺院に属さずに病院や施設で働く聖職者(牧師、神父など)のこと。



臨床宗教師の現場に触れる

第10回臨床宗教師研修

臨床宗教師の研修の様子を学ぶべく、12月14・15日と東北大学大学院実践宗教学寄附講座主催 第10回臨床宗教師研修が行われている仙台市へ向かいました。

会場へ到着した時に行われていたのは、受講者がそれぞれの現場での会話記録をもとにみんなで話し合い、お互いの思考の癖



を気づき合うグループワークでした。片隅で様子を見ながら、自分ならどう対応するだろう、また思考の癖を分析されるのは恥ずかしさもあるけれど、自分がどう人と接しているのか、傾聴ができているのかなど自分の癖に気づくことができる研修だと感じました。

この研修には全国からさまざまな宗教の方々が集まっておられました。お話を伺うと、「他宗について持っていたイメージが変



わった」研修を通して寝食を共にし、同じ志をもった仲間と切磋琢磨できた」など感想をいただきました。臨床宗教師の基本的な考え方の中に、他者の信仰の尊重と宗教間連携があることを実感しました。

高橋悦堂師に同行して

12月16日、高橋師が訪問している「ホー

ムホスピスにじいろのいえ」へ同行させていただきました。住宅街の一角にある家に入り、まず感じたことはとても賑やかで温かい家庭にお邪魔した気分になったことです。同じ屋根の下、共に助け合って生活している空気をひしひしと感じました。

この日、高橋師と共に取材にご協力下さったのが、今号の表紙の写真で高橋師と対話されている角田義廣さん。重い肺の病気で時折苦しそうに咳き込まれながらも終始笑顔でお話をして下さいました。最初のように声をかけたらいいのか、またどのような話をすればいいのかと考えていた私たちは高橋師から「病状への配慮は必要だが」どんな状況でも人間は対等であるから気構えることなく普通に接すればよいという姿勢を学ばせていただきました。

ホームホスピスからの帰り道、高橋師がお話された言葉が印象に残っています。

「私たちは風邪をひかないように、けがをしないようにと予防しますよね。この予防と一緒に、私たちは「死」についても日ごろから意識して考えないといけないと思います。現代は「死」を遠ざける傾向があります。誰も必ず「死」が訪れるのに近所で死者が出ることを嫌がる人もいます。私たち宗教者は「死」の現場だけでなく、普段の教化活動でも死から目を背けず真摯に取り組む姿勢が大事だと思います」

臨床宗教師だから行うのではなく、全ての宗教者が行うべきことだと学んだ現場同行でした。

人びとと寄り添うために

〈臨床宗教師としての心得〉

- ① 社会で起こるあらゆる出来事を整理し理解できる人
- ② その出来事から起こりうる人間の喜怒哀楽をイメージできる人
- ③ その喜怒哀楽から起こりうる人間の心の動きに対処できる人
- ④ 限りなく人間という存在が愛おしい人

僧侶として、大衆との接点を求めて何ができるのか、その一つの関わり方として「臨床宗教師」があることを、東日本大震災七回忌を迎えるこの時期に特集しました。

昨今、メディア等でも取り上げられ、「臨床宗教師」の名が宗教者の新しい取り組みとして世間に広まりつつあります。しかし、この心構えを宮城県通大寺御住職・金田諦應老師が「臨床宗教師の心得」（右開み参照）とまとめられているように、決して一部の専門家が行うものではなく、全ての宗教者が人びとと寄り添うために必要不可欠な要素であることを今回実感しました。

日本は超高齢社会に突入しており、2025年には団塊の世代が高齢者となることから、少子高齢化問題が加速して看取り場所が確保できない「看取り難民」などの問題が生じてくることが予想されています（2025年問題）。

までには、私たちには想像もできないほどの思いがあったことでしょう。角田さんのように、生老病死と向き合い自らの「いのち」と向き合う方がたに対し、多忙である医療や介護の現場でゆっくり部屋をまわり、一人一人の話を傾けてそれぞれの思いを受け止めてくれる人がいるというのは、ご本人だけでなく医療・介護関係者にとってもとても心強いことではないでしょうか。生活上で関わりのない相手だからこそ本当の胸の内を話せるということもあります。

また臨床宗教師は、自分の信仰を相手に押し付けず、あくまでその方自身の価値観に基づいて「その人にとっての心の支え」を見つめ

病院に任せきりの姿勢から、自宅や特別養護老人施設という地域での看取りを目指す意識転換が急務であると考えられています。

『ホームホスピスにじいろのいえ』で出会った角田さんは、仕事に対する信念、周りの人への感謝、父親への尊敬の念など、私たちに沢山の話をしてくださいました。夫婦共に難病を発症して、一緒に『にじいろのいえ』で生活されていることについても「夫婦でゆっくりしなさい」という意味なのかな」と穏やかに語られています。

ていきます。これは多忙な医療や介護現場のスタッフや家族だけでは果たせない役割なのかもしれません。こういった他職種の方がたとえ連携させていたがながら人びとに寄り添うことが、今僧侶にも求められているのでしょうか。

そのためには共に学び研鑽を重ね、自己の信心を揺るがないものとする一方で、公共の現場に立ち入るにあたっての慎み深い態度と、相手の価値観を重んじる姿勢を学ぶことが重要です。

宗教者にとって、信者への布教伝道という従来の活動と、公共の場で人びとに寄り添う活動を両輪として働かせ、生きている間から宗教に親しみ、死生観を養う機会を持つことのできる社会づくりに全力を挙げて取り組むことが肝要です。そうすれば臨床宗教師の活動は、「臨床」という特殊な場面だけで行われている活動ではなく、宗教者の日常生活の取り組みとしてさらに受け入れられていくでしょう。今後一層の広まりに期待申し上げます。

文／広報委員会一同

日本臨床宗教師会
Society for Interfaith Chaplaincy in Japan (SICJ) since 2016



- 日本臨床宗教師会設立趣意書→こちら
- 日本臨床宗教師会役員一覧→こちら
- 日本臨床宗教師会規約→こちら(PDFファイル)
- 臨床宗教師倫理綱領および→こちら(PDFファイル)
- 臨床宗教師倫理規約(ガイドライン) および解説→こちら(PDFファイル)
- 日本臨床宗教師会への入会について→こちら

- 臨床宗教師とは(東北大学作成 臨床宗教師パンフレット) →こちら
- 各地の臨床宗教師会の問い合わせメールアドレス(★を@に変えてください)
- 北海道東北臨床宗教師会 ht.rinshushikai@gmail.com (事務局)
- 関東臨床宗教師会 kanto.rinsyo.syukyoshi@gmail.com (事務局)
- 中部臨床宗教師会 tanaka.amitaba@gmail.com (田中正道)
- 関西臨床宗教師会 shimidzu_masahiko@yahoo.co.jp (清水正彦)
- 中国地方臨床宗教師会 bluefrog@gmail.com (梶野航胤)
- 九州臨床宗教師会 k.rinsyo@gmail.com (事務局)

リンク：臨床宗教師に関連する大学機関等のホームページ→こちらから



連絡先
日本臨床宗教師会事務局
980-8576 仙台市青葉区川内27-1 東北大学大学院文学研究科実践宗教学講座内
e-mail: sicj@g-mail.tohoku-university.jp (★を@に変えてください)

日本臨床宗教師会ホームページトップ画面
http://www.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/sicj/sicj_top.html

東日本大震災から6年

〜現地の今、活動者の思い〜

供養は続かねばならぬ

重ね重ねも先の台風被害と合わせ、これまでの長きに涉った各方面へのご支援に、心よりの感謝と御礼を申し上げます。

気の遠くなる様な当時の状況から6年



弱、月日の流れと共に環境、人びと、少しずつの移ろいを思います。行政としての思い、待つ人びとの思い、支えて下さっている人びとの思い、残念ではあっても県外への離檀等、寺院としての思い等等。発災間もなくからお力添えいただいた全曹青各曹

青様との行茶傾聴活動等も、有志の教区青年会諸師、OBの諸先輩により続いて参りましたが、仮設住宅の集約、漸くにしての新居・公営住宅等への移動も見えて来たことから此方の活動は判断できそうです。一方、先の台風被害により、仮設住いの方がた、折角海を離れ山側に新居を構えながら再罹災された方がたは、更に寄り添いが必要になりました。公営住宅など独居の方がたの見守りも地域コミュニティとの連携なども視野に入れねばならないのかもしれない。

様ざまな思いは有れど、あの方がたの一巡りの七回忌も参ります。又、少しずつではあってもこの地と別れを告げ参ろうとされる方がたの為に我われの供養は続いて行かねばならぬのだと思つて居ります。迎えます日は県内20ヶ寺様それぞれに諸師を

向けさせていただき、懇ろのご供養が適えばと念じて居ります。有意の皆様にもご加担賜りますればとお願いを申し上げます。御礼券がたご報告とさせていただきます。

岩手県曹洞宗青年会会長／石ヶ森桂山

人は関わり合いの中で 仁(ひと)となる

震災からの6年を想う時、それは学びや氣付きの歳月であり、傾聴活動や慰霊行脚など被災された方やご遺族と歩ませていただく中で磨かれていく自己にもありました。真剣にいのちと向き合う中で強く求められたものは慰霊や供養、心の復興に寄与することでした。

「人が大勢集まるところには今も行きたくないのです。でも我が子に少しでも近づけるのではないか。ただただその思いです」。昨年11月、2,000人規模で修行された七回忌法要にお誘いした折、津波で幼い二人のお子さんを亡くされた親御さんからの言葉でした。このような思いを抱いている方が今もたくさんあります。そうした思いに僅かでも応えたい。それが恐ろしくは被災地域青年僧の原動力となってきたのではないかと思います。震災前の檀信徒の方がたとの関わり方が希薄だったと猛省する日もありました。お一人おひとり向き合う中で学ばせていただくことがなんと多いことか。震災に限らず、我われ僧侶は悲嘆が和らいでいく姿の傍らに寄り添い、

僅かでもそのお手伝いや橋渡し役となれる存在であると、あらためて気付かされたのでした。七回忌を終えるこれからこそ、ともに歩む地元の僧侶「仁(ひと)」でありたいと思っております。

宮城県曹洞宗青年会会長／北村曉秀

露わになった歪みを見守る

発災から6年。全国から様ざまな形でのご支援、ご足労に改めて御礼申し上げますと共に皆様の温かいお心添えに深く感謝いたします。「被曝」という未知の恐怖から、部屋に閉じこもり、余震に怯え、ラジオからの情報に必死に耳を傾けていた当時の自分の姿が今でも鮮明に思い起こされます。

地震、津波、原発の影響はそれまでの人間の歪みを全てあぶり出してしまったと改めて感じております。地域格差。経済格差。しかし特に深刻なのが家族内の分断だったかと思えます。特に夫婦間の意識の差に大きなダメージを与えました。緊張の糸が切れた。タガが外れた。つまり、それぞれが自分自身個人の人生を考え直し始めたのです。一時期、震災婚が話題になりましたが、その倍以上の家庭が真逆の状況に陥った現実を沢山見聞きしてきました。

日日の現実直面せざるを得なかった大人。その背中を見てきた子ども達…。子ども電話相談の統計によると、福島県の子ども達は進路将来の事、自殺自傷に関する



相談割合が他県に比べかなり高かったそうです。震災を通じて子どもが子どもらしく成長出来なかった影響が今も尾を引いている。そのように感じております。

様ざまな不安が渦巻く中、それでも福島を生き続けている、生きていく人びとの姿を今後も温かく見守っていただきたい。そのお気持ちから福島の一番の力になるとも確信しております。

福島県曹洞宗青年会会長／瀧澤勝俊

共に汗を流し

平成23年3月11日、東日本大震災が発生して以来、曹洞宗静岡県第一宗務所青年会（以下、当会）では、直後から情報収集に努め、まず3月15日から17日にかけて募金活動を行いました。その後東北での支援活動を検討し、4月12日に先遣隊として岩手県・宮城県に赴いたのを皮切りに、福島県を含む東北3県を中心に平成27年2月まで

51回に亘り活動して参りました。主な活動内容は、追悼慰霊法要参加、イチゴ農家・一般家屋・墓地等での清掃、避難所・仮設住宅での傾聴ボランティア、アスレチック作りなどです。

私達は決して災害ボランティアのエキスパートではありません。専門的な知識や技術を持っていくわけでもありません。ですが実際に現地に赴き、共に汗を流しお話を聴くことでお役に立てることがあるのならば、会員一同精一杯お手伝いさせていただきます。

震災からもう6年なのかまだ6年なのか、身の回りの報道では記事を目にする機会も減ってきました。ただ自然災害自体は各地で頻発しており、遠近問わずお困りの人は多くいます。これからも当会では、東日本大震災は勿論、熊本地震等、様ざまな災害に対し、出来る限りの活動をして参ります。

最後になりますが、当会の支援活動に際し物心両面でご協力いただきました宗務所管内の各ご寺院様、また活動現場でサポートしていただきました曹洞宗東日本大震災復興支援室分室並びに全国曹洞宗青年会の皆様に深く感謝申し上げます。

曹洞宗静岡県第一宗務所青年会会長

／磯田辰哉

伝え繋げていくことを

東日本大震災発生後、山口県内の曹洞宗

関連団体は山口県曹洞宗災害支援現地活動部を組織し、平成23年5月から岩手県釜石市を拠点に行茶活動を開始しました。行茶活動は、アンケート調査では得られない要望を会話の中から把握し行政に伝えることやストレスの軽減という役割も担いました。仮設住宅という特殊な状況下では横の繋がりを保つことが難しく、交流の場としても役立つことができました。平成26年12月からは山口県曹洞宗青年会が活動を引き継ぎ、現在も行茶活動を行っています。

復興支援活動に参加させていただき、現地での支援活動は多くの方がたの思いが一体になったものと実感しました。現地での支援活動をする人、その活動を支援する人、今の私にできるそれぞれの支援が現地での活動を支えています。最近特に強く思うことは、現地で見たこと・聞いたこと・感じたことを伝え繋げていくことを大切にすることです。ご支援いただいた方がたやご縁のある方に、現地の今の状況をお伝えする機会、その機縁から支援の輪が更に広がっていくのだと信じています。

同じ時代を生きる仲間として共に生きることに、分かち合い・支え合いの輪が笑顔に繋がっていくように、今後も私たちにできる活動を行って参りたいと思います。合掌

山口県曹洞宗青年会会長／清木隆法

魂に届く支援に

東日本大震災発生以降、釜石市で復興支

援活動を展開した「さくらネット」の阪神淡路大震災における興味深いデータがあります。復興感についてのアンケートで、被災後9年後に兵庫県内在住の80%以上の人が「自分が被災者」だと意識しなくなったのですが、その結果として最も多かった回答は、「今後も不自由な暮らしが続くと覚悟した」というものでした。

東日本大震災発生から、間もなく6年目を迎えようとしています。今回は被災者の方がたに「自分が被災者」だと意識しなくなっていただけの人は、はたしていつになるのでしょうか。そして、「不自由な暮らしが続くと覚悟した」時に一緒に考え悩んでくれる人はどこにいますでしょうか。

「ふくしま心のケアセンター」前副所長・内山清一氏の言葉には、「これからの被災地では、もはや心ではなく、魂に届く支援が必要とされている。被災し苦悩する方がたの背景の全てを、善悪という相対的価値観をも超えて自分のものとして引き受けていってくれるのは誰なのか」とあります。被災地に対する支援は、時間の経過とともに減少し、風化により忘れ去られようとしています。被災地の悼みを引き受け、その苦悩にどう寄り添っていきけるのか。

今後も私たちに求められている魂に届く取り組みを、あらためて、いまここからはじめていきたいと思えます。

曹洞宗東日本大震災復興支援室分室主事

／久間泰弘

七回忌 「慰霊復興祈願のつどい」 福島市・圓通寺で平成29年3月10日開催



平成29年3月11日、東日本大震災発災から丸6年、七回忌を迎えます。

全国曹洞宗青年会（以下、全曹青）では、19期に福島県伊達市成林寺様境内に設置された全曹青災害復興支援現地本部の立ち上げから今日まで、20期・21期と支援活動を継続的に行わせていただきました。

全曹青では七回忌を迎えるにあたり、福島県福島市圓通寺御住職・吉岡棟憲老師にご協力をいただき、老師が園長をお勤めの学校法人ルンビニー学園が運営する福島ルンビニー幼稚園、また圓通寺様の境内・本堂・檀信徒会館を会場にお借りし、連夜にあたる3月10日に二部構成の「東日本大震災七回忌・慰霊復興祈願のつどい」を開催いたします。

第一部はルンビニー幼稚園に在園している園児を対象に行います。園児たちは全て震災後に誕生した子どもたちですので、成長や情操に影響を与えないよう配慮した上で、青年僧侶による「同事」に関する寸劇上演を予定しております。その後、園内中庭で保護者の皆様と合流し、メッセージを載せた風船を空に飛ばします。

第二部は場所を圓通寺様に移し、全曹青安達瑞樹会長導師の下、山形県曹洞宗青年

会が中心となり、萬灯供養による東日本大震災七回忌速夜供養「祈りの時間」を行います。最後に、江戸時代には慰霊鎮魂として打ち上げられたこともある花火を、「鎮魂の花火」として大空高く打ち上げ、全曹青21期のテーマ「笑顔の君とおなじ空を見上げて」の如く、参加者全員で共におなじ空を見上げ、慰霊と復興を花火に祈ります。

また福島県・宮城県・岩手県で3月10日から11日にかけて、沿岸部各所の寺院等で慰霊法要が執り行われる予定です。全曹青、また全国各地から参集した青年僧侶も、これらの法要のいくつかに随喜させていただきます。共に慰霊と復興を祈ります。

自然災害の強大な力に私たちが無力なのは残念ながら仕方のないことなのかもしれません。しかし、被災地で命が助かったにも関わらず、自死・孤独死が起っていることは僧侶として行動に移さないわけにはいきません。今後も継続的に支援を行わせていただくことで、少しでもそのお気持ちに寄り添うことが私たち僧侶の役割であると思います。当日は被災地で愛すべき人を亡くされた方がた、被災された方がた、子ども達、全国の僧侶の皆様と一緒に「おなじ空を見上げて」、共に弔いの時間になればと思います。

文／災害復興支援部事務局長 城市泰紀

※「東日本大震災七回忌・慰霊復興祈願のつどい」の詳細につきましては、『SOUS E』175号同封のチラシをご覧ください。

納僧募集

東シナ海海防の要・長崎県佐世保市に立地するお寺です。僧堂安居修了後、実地修行の場として、また見聞を広めるの勤務に応募ください。

仕事内容

法務・作務

社会保険あり

住居手当あり

自動二輪免許取得助成あり

応募資格

僧堂安居修了者、予定者

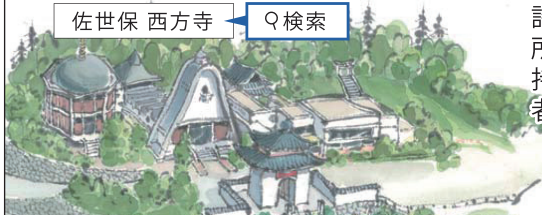
自動車普通免許所持者

詳細はご連絡下さい。

東陽山 西方寺

長崎県佐世保市八幡町 5-13
TEL 0956-22-4272
FAX 0956-22-4244

佐世保 西方寺 🔍 検索



平成28年11月3日

第5回「つるみ夢ひろばin總持寺」

パネル展やチャリテイバザーを出展

5回目を迎えた『つるみ夢ひろばin總持寺』に、昨年同様大本山總持寺様より出展のお話をいただき、ブース出展をさせていただきます。

この『つるみ夢ひろばin總持寺』は、東

日本大震災が起きた5年前に復興支援を掲げて始められ、大本山總持寺・鶴見区、それに賛同していただける個人・企業・団体で開催しています。この出展に際して全国曹洞宗青年会（以下、全曹青）災害復興支援部では、目的とテーマにある被災地支援と防災に関わるブースを設置し、義援金箱やパネル展（第19期に作成した支援活動の写真パネル）に第20期、第21期の活動風景を追加したものをブース内に展示しました。

更に今回は近藤産興株式会社（愛知県名古屋市中南区）のご好意により、災害時の炊き出しや災害備蓄としても活用出来る様にと中古調理器具を大量にご寄付いただき、この物品の中から一部を東日本大震災七回忌に向けてのチャリテイバザー出品物として販売しました。

売上金は全てボランティア基金に入金し、購入者・募金協力者には総合企画委員会が制作した復興ロウソク『復興への灯火』（約千本、詳細は下部記事参照）をお持ち帰りいただき、七回忌に向けた被災地支援の活動の周知を図りました。

文／副会長 倉島隆行

復興ロウソク 「復興への灯火」 御礼とご報告



「全国から被災地に願いと祈りを」の想いでスタートした復興ロウソクプロジェクト。加盟青年会より多くのロウソクをご提供いただき、9000本の復興ロウソク「復興への灯火」へと再生されました。ご協力いただいた加盟青年会、並びに企画趣旨にご賛同いただきご助力いただいた全日本ロウソク工業会様に厚く御礼申し上げます。

全国各地からの想いが詰まった復興ロウソクは、大本山總持寺にて開催された東日本大震災復興イベント「第5回つるみ夢ひろば」の参拝者、曹洞宗青年会東北集會「東日本大震災七回忌法要」の参列者へ記念品としてお配りさせていただきました。

また3月に開催する全曹青主催・東日本大震災七回忌「慰霊復興祈願のつどい」や、曹洞宗福島県青年会東日本大震災七回忌法要・復興祈願法要イベントにて、参加者へお配りさせていただきます。全国の皆さまからいただいたロウソクは「復興への灯火」として生まれ変わり、被災地の方がたや被災地の支援をする方がたのもとで、穏やかな祈りの時間を与え、復興への未来を照らしていることをご報告し、御礼の言葉とさせていただきます。

文／総合企画委員長 岡島典文



教会の御堂で坐禅 味来食堂in釜石

平成28年10月24日午前10時から、岩手県釜石市のカリタス釜石様とカトリック釜石教会様を会場に、「味来食堂in釜石」坐禅と僧食を学ぼう」が開催されました。僧侶側は、全国曹洞宗青年会（以下、全曹青）の神作副会長、岩手県曹洞宗青年会の石ヶ森会長ら東北を中心に8人が参集。参加者は、地元の方がたを中心に17人が参加されました。

先ず参加者は教会2階の礼拝堂に移動。教化法式委員会の金森副委員長から坐禅の作法についてご説明し、全員で心静かに15分の坐禅を行いました。

その後、隣接する建物の調理場に移動し、参加者と僧侶が共に調理を行いながら、6品の精進料理を完成させました。

石ヶ森会長が冒頭のご挨拶で「いつもと違い、キリスト様の前で坐禅をさせていただくことは、改めて身が引き締まる思いです」とお話しされていたように、今回の開催は、教会の御堂で曹洞宗の坐禅を行うという有難いご縁に恵まれました。震災直後から活動されてきたカリタス釜石様と共に、また、宗教を超えて共に復興を願う大切さを実感できた開催でした。

全国曹洞宗青年会（以下、全曹青）では、教化法式委員会の継続事業「味来食堂」を地元青年会の協力をいただき東北で開催することにより、青年僧侶と参加者との共同作業の中で交流を深めております。既に岩手、宮城での開催を行い、平成29年2月には福島県での開催を予定しております。

「味来食堂」東北開催

平成28年12月2日午前9時30分から、宮城県亘理町の亘理町農村環境改善センターを会場に、「味来食堂」僧食を学ぼう」が開催され、僧侶は天野東北管区理事をはじめ地元宮城県曹洞宗青年会、曹洞宗東日本大震災復興支援室分室、全曹青から9人が参加。一般の方は近隣や県内の方31人が参加されました。

今回は、初めに精進出汁のご紹介をした後、調理テーブル毎に別の料理を進めていく方式を取り、合間には冷やす・蒸らすの調理工程の間に休憩を入れるという今までは少し違った進め方となりました。休憩時には、お茶をいただきながら参加者同士や青年僧スタッフと話をされていました。

2時間ほどの調理で6品の精進料理が完成。全員で『五観の偈』をお唱えしてから頂戴いたしました。最後は後片付け、洗いの物、拭き上げまで参加者で行いました。

参加者の中には「お坊さんと一緒に料理を作ることができると聞いて、震災以降は人が集まるところを避けていたが、久しぶりに（人が集まる場に）来た」と語られる参加者もおられました。

上下とも 文／広報委員長
宮人真道

精進料理に人びと集う 味来食堂in亘理町





平成28年12月14日 復興支援室と全曹青の合同会議を実施

平成28年12月14日、福島市の曹洞宗東日本大震災復興支援室と全国曹洞宗青年会（以下、全曹青）の合同会議が行われ、武藤総務部福祉課係長、全曹青安達会長、石ヶ森岩手県曹洞宗青年会会長、瀧澤曹洞宗福島県青年会会長以下19人が参加いたしました。会議では、平成29年3月10日に開催される「慰霊復興祈願のつどい」の打ち合わせを中心に、前後の慰霊法要に関する動向などを確認・決定いたしました。また、武藤係長からはストックヤード事業について、昨今の自然災害の多さを鑑み、西日本に新たにストックヤードを設ける計画が進んでいることをご報告いただきました。

翌日の15日には、「慰霊復興祈願のつどい」の会場とさせていただく福島市圓通寺様に安達会長以下5人をお伺いし、現地での打ち合わせを行いました。



平成28年12月21日 恒例の年末鍋行茶 福島県国見町で開催

平成28年12月21日、福島県伊達郡国見町の大木戸ふれあいセンターを会場に、年末鍋行茶を開催いたしました。当日は近隣の仮設住宅に暮らす方がたをご招待し、地元社会福祉協議会の皆様、曹洞宗宗務庁から河村総務部長をはじめ総務部の皆様、久間支援室分室主事をはじめ分室の皆様、地元曹洞宗福島県青年会や秋田県曹洞宗青年会、長野県第一宗務所青年会から参加の青年僧に加え、全曹青参加者ら50人以上が集まりました。

今回で5回目となった鍋行茶。全国からお寄せいただいた食材や飲み物がテーブルを彩り、秋田の「きりたんぼ鍋」に加え、島根の「ネギ塩豚鍋」広島のカキと愛知のカニを具材とした「雪見鍋」の3種類の鍋をメインに、当日参集した方がたの地元料理も添えられ、例年にも劣らないおもてなしとなりました。

毎年恒例となったプレゼント抽選会の後、安達会長のギター伴奏と酒井副会長の主導による参加者全員合唱。福島県出身の丘灯至夫作詞、古関裕而作曲の「高原列車は行く」をはじめ、「365日の紙飛行機」上を向いて歩こう」などを合唱。最後は参加僧侶がステージ上で肩を組み、S.M.A.Pの「世界に一つだけの花」を会場全体で歌いました。

東日本大震災から6年を迎えようとする今、今後の状況次第では国見町で行う鍋行茶は今回が最後となるかもしれないというお話もありました。毎年この鍋行茶を楽しみにしておられる方がたが故郷に戻ることが出来る日が来るのは嬉しいことですが、依然残された課題も数多くあります。七回忌が一区切りではありますが、今後も分室の皆様と共に、全曹青として福島の皆様とご縁を大切にしていければとの思いを新たにいたしました。

上・下とも 文／広報委員長 宮入真道

平成28年10月18日・19日

第39回中国曹洞宗青年会・山口大会

『一如』ichinyo ～心を同じくし一船に乗るがごとく～



平成28年10月18日・19日の両日に亘り、山口県山口市で第39回中国曹洞宗青年会山口大会を開催させていただきました。

東日本大震災から間もなく6年、記憶を風化してはいけません。また、近年頻繁に発生する自然災害による多くの被害、私たちにできる支援とは何か。今大会は『一如』ichinyo ～心を同じくし一船に乗るがごとく～をテーマに掲げ、同じ時代を生きる仲間として共に生きること、分かち合い・支え合いの輪が更に広がっていくように、願いをこめ大会を企画いたしました。

大会1日目は『心の大学講座』を併催し、一般の方にもご参加をいただきました。復興支援舞台『イシノマキにいた時間』(東日本大震災後、約1年に亘り宮城県石巻市でボランティア活動に従事したコメディアンであり脚本・演出家でもある福島カツシゲ氏が「今こそ、今だからこそ、役者にできることがある」と2011年冬に書き上げた作品)の映像上映、アフタートークは福島カツシゲ氏と石巻在住写真家の鈴木省一氏に当時と現在の石巻をお話いただきました。



大会2日目は中国地区青年僧侶、県内僧侶・寺族を対象に、復元納棺師として東日本大震災でも活動され、また、遺族の方へのグリーフケアも行ってこられた笹原留似子氏に『復元ボランティアと呼ばれて～東日本大震災の安置所から～』と題して、たくさん死をみつめ、ご遺族の深い悲しみに向き合ってこられた視点からご講演をいただきました。

大会1日目は約250人、大会2日目は約100人のご参加をいただき、参加された方がたからは「素晴らしい舞台だった」「支援を考える機会になった」「貴重な講演だった」と、お声がけをいただきました。被災された方がたと向き合ってきた方々の体験や思いに触れていただき、感じたことを伝え繋げていく機縁として実りある大会になったのではないかと思います。今大会に際しまして、ご協賛ご後援をいただきました皆様にご心より御礼申し上げます。

文／山口県曹洞宗青年会会長 清水隆法

合掌

平成28年11月9日

第41回曹洞宗青年会東北地方集会宮城大会

まごころに生きる



平成28年11月9日、宮城県仙台市の仙台サンプラザホールを会場に、第41回曹洞宗青年会東北地方集会宮城大会「まごころに生きる」が開催されました。

午前10時から記念式典が行われ、「佛祖諷經」を天野大真大会会長（東北地区曹青連絡協議会会長）の導師の下でお勤めし、天野大会会長、北村暁秀大会実行委員長（宮城県曹洞宗青年会会長）の挨拶や来賓各位の御祝辞をいただいた後、大会に集った一同が復興への心を新たにす「誓願文」を、天野会長が代表して宣読されました。

「同悲同苦の菩薩行―まごころに生きる― 体現者としてともに歩む」

（第41回曹洞宗青年会東北地方集会宮城大会「誓願文」から引用）

また、大会の最後には次期開催県を青森県とすることが発表され、大会実行委員長の緒子が北村実行委員長から天野会長の手に戻り、次期開催県の山口龍堂師（青森県曹洞宗青年会会長）に伝達されました。

一般の方は午後0時30分に開場予定でしたが、当日は強い風の中、多くの方がホール前でお待ちいただき、予定より早めに開

場すると2,000席ほどのホールが30分と経たずに満席となりました。北村大会実行委員長の挨拶の後、午後1時30分から第一部「東日本大震災七回忌法要」が、大本山總持寺貫首江川辰三大禪師猊下御親修の下、厳修されました。会場内には散華が舞い、歎佛会法要をお勤めし、厳かな読経により犠牲となられた方の追悼と復興への誓願を祈りました。参加者お一人お一人も手を合わせ、それぞれの思いを胸に祈りを捧げました。

午後3時からは第二部「復興祈念 和太鼓」が、三重県曹洞宗青年会有志「鼓くす」により行われました。慰霊と鎮魂、そして復興への祈りを音に乗せ、静と動が絶妙に組み込まれた壮大な和太鼓がホール内に響き渡り、演奏後は万雷の拍手に包まれました。

午後4時前からは第三部として、シンガーソングライターの南こうせつ氏による「追悼復興コンサート」が開催されました。大震災のこと、曹洞宗との繋がりなどのトークを挟みながら、ご自身の代表曲の演奏、また、今大会のテーマでもある「まごころに生きる」も披露されました。

文／広報委員長 宮入真道

平成28年11月27日 第40回東海管区曹洞宗青年会大会 禅のつどい

平成28年11月27日、愛知県第一曹洞宗青年会40周年記念事業・第40回東海管区曹洞宗青年会大会「禅のつどい」が大本山永平寺名古屋別院で行われました。



午前9時から、約1000人の一般参加者が見守る中、開講式が行われました。その後、坐禅や写経また線香作りや数珠作り等の体験講座が設けられ、参加者は真剣な眼差しで取り組まれました。

体験講座が終ると昼食には典座寮お手製の精進料理を心静かにいただき、午後1時から愛知県第一曹洞宗青年会から名古屋別院へ贈呈された写経観音像の開眼法要が行われました。導師を名古屋別院監院井上義臣老師が務められ、法要後には仏師の小林美照師より写経観音像の説明を受け、参加者が午前中に心を込めて書いた写経用紙を各各の手によって納経されました。

午後2時から六代目三遊亭円楽師匠をお迎えして『笑顔の日本語』ユーモアコミュニケーションズ』と題し、記念講演会が行われました。

「まず初めに皆様にお伝えしたい事がございます。歌丸は生きてます！」この言葉から始まった講演会は今まで坐禅や写経、線香作りや数珠作り、また昼食や法要など参加者にとっては言葉を発せない緊張状態から一気に解放された瞬間でした。

師匠は27歳で『笑点』のレギュラーに抜擢



され、以来39年間レギュラーの座に就かれています。20年ほど前に「言葉」について思い悩み、勉強をし直されたそうです。その時の例としてこの様なお話をされました。

英語字幕の付いた日本の時代劇を見ていたら、ある侍が「お控えなすつて」と言いました。皆さんこの「お控えなすつて」の英語訳は何だとおもいますか？ その時代劇では「how are you?」ですよ。日本人の気持ちとして「お控えなすつて」は決して「how are you?」ではありませんよね。

日本語の成り立ちや言葉の使い方を勉強するにつれ、その国の言葉でしか伝わらない「息吹き」「血の匂い」その人が背負っているものが言葉の中に存在している事に気づかれたそうです。

また、「笑い」は人間が持っている高度な感情であり、笑いを作り出す・笑わせるとい

う行為も人間だけが出来る行為であるのに、最近では経済主体の時代になり「笑い」が少なくなってきた。自殺者が増え、医者に「ストレスです」と言われると安心してしまふ世の中になった。考え方を変え「柳に風」でストレスを緩やかに忘れていく事も大事と話されました。

最後に、日本語には様々な表現方法があり、人間だけが笑う人間だけが相手を笑わせる言葉を持っている。人と人はその様々な言葉と笑顔で繋がっています。とお話され講演会を終えられました。

演題のとおり最後まで笑顔と笑いの90分間で「まだまだ聞いていたい」「良い意味で、まった」等、参加された方がたも笑顔で話されておりました。

文／広報副委員長 鬼頭大輝



執行部会・理事会

平成28年11月14日から15日にかけて、曹洞宗檀信徒会館4階「芙蓉の間」を会場に、執行部会・理事会が行われました。

七回忌を迎える東日本大震災に際し、全国曹洞宗青年会（以下、全曹青）が3月10日に主催する「慰霊復興祈願のつどい」や、前後に行われる慰霊法要への随喜などについて、詳細を話し合いました。また、各委員会の活動中間報告と会計中間報告について精査が行われました。



東日本大震災 七回忌予修法要

平成28年11月16日午前10時から、大本山總持寺三松閣4階大講堂で、東日本大震災七回忌予修法要をお勤めいたしました。全曹青の参加者、各管区理事の方がた、各青年会の会長を務める評議員の方がたが集い、安達会長を導師に本尊上供と『普門品偈』を誦誦し、復興への願いを新たにしました。

被災地現状報告会

予修法要終了後、同じく大講堂を会場に、午前10時から東日本大震災被災地の現状報告会が行われました。

宮城県曹洞宗青年会の北村暁秀会長からは、これまでの多岐にわたる支援活動を振り返り、慰霊供養を通じて「心の復興」に寄与していきたいと語られました。未だ他校の敷地に建てられた仮設校舎での学校生活を余儀なくされている子どもたちの現状が伝えられました。

曹洞宗福島県青年会の瀧澤勝俊会長からは、原発事故で地域に経済的な格差が生まれたこと、多くの家族が分断されている現状を話されました。「チャイルドラインふくしま」に寄せられる子どもからの相談に進路の不安や自傷行為に関する内容が多いこと、にふれ、苦しい胸中を明かされていました。

岩手県曹洞宗青年会の石ヶ森桂山会長からは、スライドを用いて被災当時から現在までの変遷と、復旧の進まない台風10号の甚大な被害状況を紹介されました。県が南北に長いいため七回忌法要は一カ所で開催するのではなく、被災寺院に青年会員を派遣し同時に法要を行う意向であると発表されました。

どの県の会長も、これまでの支援に対して深く謝意を述べられていました。支援活動を重ねてこられた3県の青年会の皆さまは、昨年11月9日に開催された東北地方集會宮城大会も通過点であり、同じ姿勢で出来ることを続けていきたいと一様に力を込められました。

臨時評議員会

休憩後、同じく大講堂を会場に、午後1時から臨時評議員会が行われました。

来賓挨拶では大本山總持寺後堂前川睦生老師から挨拶のお言葉をいただきました。会議では各委員会中間報告、会計中間報告などを審議いただきました。

また、次期全国曹洞宗青年会22期で倉島隆行新会長を支える副会長候補、河口智賢師、原知昭師、菅原宗玄師の3人が会長選考委員会から推薦され、全会一致で可決されました。

次に、第21期全日本仏教青年会の理事長



は曹洞宗から推薦される方向で調整が進められていることが報告されました。

議事終了後は多くの評議員様からご報告やご案内があり、活気に満ちた会となりました。

臨時総会

午後3時30分から行われた臨時総会では、曹洞宗宗務庁の山本健善教化部長老師から挨拶のお言葉をいただきました。

続いて臨時評議員会で承認された次期副会長の3人が紹介され、全会一致で承認されました。

〔 ボランティア基金感謝録 〕

東京	曹洞宗務庁 様	京都	龍猷寺 様	岩手	正傳寺 様
東京	青松寺 様	大阪	吉祥院 様	岩手	瑞雲寺 様
東京	長泉寺 様	大阪	黄梅寺 様	岩手	恩流寺 様
東京	清巖寺 様	兵庫	醫王寺 様	青森	高澤寺 様
東京	光寶寺 様	兵庫	向榮寺 様	青森	盛雲院 様
埼玉	吉祥院 様	岡山	済渡寺 様	青森	法蓮寺 様
群馬	福巖寺 様	広島	達磨寺 様	青森	聖福寺 様
茨城	龍泉院 様	広島	萬福寺 様	山形	満福寺 様
茨城	龍心寺 様	広島	善興寺 様	山形	永蓮寺 様
千葉	慶林寺 様	広島	延命寺 様	山形	瀧応寺 様
千葉	宗胤寺 様	山口	吉祥寺 様	秋田	蚶満寺 様
千葉	満蔵寺檀信徒 高橋信之 様	島根	完全寺 様	秋田	宝昌寺 様
静岡	海藏寺 様	島根	龍覚寺 様	秋田	靈仙寺 様
静岡	窓泉寺 様	島根	法藏寺 様	秋田	東林寺 様
静岡	長興寺 様	愛媛	西禅寺 様	秋田	源正寺 様
静岡	孤雲寺 様	愛媛	本光寺 様	秋田	圓福寺 様
静岡	洞雲寺 様	長野	盛隆寺 様	秋田	宝門寺 様
静岡	醫王寺 様	長野	長秀院 様	北海道	孝徳寺 様
静岡	玉泉寺 様	長野	普携寺 様	北海道	全修寺 様
静岡	清富寺 様	長野	宗徳寺 様	北海道	観音寺 様
静岡	心岳寺 様	長野	廣正寺 様	北海道	廣福寺 様
静岡	普門院 様	新潟	長命寺 様	北海道	法徳寺 様
静岡	窓泉寺 様	新潟	大慈寺 様	北海道	含笑寺 様
静岡	正泉寺 様	新潟	不動寺 様	北海道	第一宗務所第二教区 様
静岡	真如寺 様	新潟	曹源寺 様	北海道	曹洞宗北海道青年会 様
愛知	報恩寺 様	福島	成林寺 様	北海道	第二宗務所第二教区青年部 様
愛知	永澤寺 様	福島	天澤寺 様	北海道	第三宗務所第三教区青年会道心会 様
愛知	成福寺 様	福島	大同寺 様	北海道	照心会 様
岐阜	勝林寺 様	宮城	西雲寺 様	北海道	北斗会 様
三重	一心院 様	宮城	満福寺 様	北海道	芳村元悟 様
三重	地藏院 様	宮城	洞松院 様		
三重	禪龍寺 様	宮城	柳徳寺 様		

〔 東日本大震災七回忌基金感謝録 〕

京都	神応寺 様
広島	萬福寺 様
島根	養善寺観音講 様
鹿児島	紘昭寺 様
岩手	青山寺 様
秋田	倫勝寺 様

全国曹洞宗青年会の活動は皆さまの賛助費に支えられております。

この度もご協力いただき誠に有難うございました。

〔 賛助費浄納御芳名簿 〕

平成28年10月1日～平成28年12月20日取扱い分

◆東京都

6 光寶寺 様
81 長光寺 様
113 長泉寺 様
118 観音院 様
177 清巖寺 様
256 妙全院 様
260 永泉寺 様
277 東源寺 様
317 龍雲寺 様
333 雲慶院 様

◆神奈川県第2

77 龍寶寺 様
131 乗福寺 様

◆埼玉県第1

67 寶國寺 様
392 報恩寺 様

◆埼玉県第2

319 永源寺 様

◆群馬県

194 善宗寺 様
231 泉福寺 様
297 福巖寺 様
309 永福寺 様
311 泉通寺 様

◆栃木県

202 明林寺 様

◆茨城県

13 龍泉院 様
113 常晃寺 様
182 龍心寺 様
197 長龍寺 様

◆千葉県

2 宗胤寺 様
7 満蔵寺 様
29 慶林寺 様
60 東伝院 様
198 太高寺 様
296 東善寺 様

◆山梨県

45 永昌院 様
59 信盛院 様
曹洞宗
山梨県宗務所 様

◆静岡県第1

109 玉泉寺 様
459 洞雲寺 様
461 心岳寺 様
464 正泉寺 様
495 普門院 様

◆静岡県第2

325 海藏寺 様
334 清富寺 様
362 福泉寺 様

◆静岡県第3

584 長興寺 様
609 醫王寺 様
612 久翁寺 様
676 孤雲寺 様
738 真如寺 様
870 窓泉寺 様

◆静岡県第4

1140 竹林寺 様

◆愛知県第1

5 功德院 様
17 光明院 様
101 成福寺 様
127 龍潭寺 様
306 成福寺 様
336 弥勒寺 様
625 宝積寺 様
635 永澤寺 様
644 増福寺 様

◆愛知県第2

8684 花井寺 様
915 大栄寺 様

◆愛知県第3

431 報恩寺 様
557 楞嚴寺 様

◆岐阜県

188 洞泉寺 様
219 勝林寺 様

◆三重県第1

24 一心院 様
36 法安寺 様
269 大蓮寺 様
273 禅龍寺 様
276 地藏院 様
446 智應院 様

◆滋賀県

2 常明院 様

◆京都府

46 榮春寺 様
79 神應寺 様
251 隠龍寺 様
355 龍猷寺 様
389 萬福寺 様

◆大阪府

26 天徳寺 様
94 黄梅寺 様

98 吉祥院 様

◆兵庫県第1

287 向榮寺 様
399 醫王寺 様

◆兵庫県第2

188 興禅寺 様
225 大雲寺 様

◆岡山県

3 長川寺 様
130 蓮性寺 様
131 濟渡寺 様

◆広島県

13 延命寺 様
26 正福寺 様
46 双照院 様

◆山口県

24 吉祥寺 様

◆鳥取県

140 瑞仙寺 様
143 瑞應寺 様
151 安国寺 様

◆島根県第2

32 宗淵寺 様
60 桐岳寺 様
63 龍覚寺 様
70 完全寺 様
139 十楽寺 様
140 法藏寺 様

◆高知

24 報恩寺 様

◆愛媛県

32 清盛寺 様
34 本光寺 様
113 西禅寺 様
146 興雲寺 様

◆福岡県

28 桂木寺 様
158 報恩寺 様

◆長崎県第1

78 宝泉寺 様

◆佐賀県

108 光明寺 様
213 瑞光寺 様

◆熊本県第1

24 玄宅寺 様

◆熊本県第2

79 向陽寺 様

107 観音寺 様

◆宮崎県

12 台雲寺 様

◆長野県第1

57 長秀院 様
128 普携寺 様
213 盛隆寺 様

◆長野県第2

375 龍雲寺 様
441 雲龍寺 様

◆福井県

272 洞善寺 様

◆新潟県第1

311 大慈寺 様
344 玄德寺 様
354 法音寺 様
358 円光寺 様
393 曹源寺 様
445 永林寺 様
477 龍泉院 様
496 長樂寺 様
503 龍源寺 様

◆新潟県第3

514 長命寺 様

◆新潟県第4

36 吉祥寺 様
302 龍山寺 様
738 不動寺 様
814 地藏院 様

◆福島県

49 大泉寺 様
101 成林寺 様
110 龍徳寺 様
113 円照寺 様
175 天澤寺 様
226 常隆寺 様
352 大同寺 様
370 秀長寺 様
一般 橋本浩一様

◆宮城県

112 法雲寺 様
138 西圓寺 様
212 祥雲寺 様
284 西雲寺 様
314 満福寺 様
461 洞松院 様

◆岩手県

13 長善寺 様
14 正傳寺 様
21 恩流寺 様
123 寶城寺 様

192 常堅寺 様
224 普門寺 様
233 玉泉寺 様
263 瑞雲寺 様
269 龍泉寺 様

◆青森県

20 盛雲院 様
39 正法院 様
44 高澤寺 様
112 法蓮寺 様

◆山形県第1

138 石川寺 様
168 高松院 様
229 瀧応寺 様

◆山形県第2

295 永松寺 様
316 金鐘寺 様
366 常信庵 様

◆山形県第3

561 勝源寺 様
593 玉川寺 様
623 歡喜寺 様
722 永蓮寺 様

◆秋田県

22 源正寺 様
79 東林寺 様
126 蚶満寺 様
179 長泉寺 様
212 靈仙寺 様
237 龍泉寺 様
252 長泉寺 様
260 松庵寺 様
261 見性寺 様
279 宝昌寺 様
326 圓福寺 様

◆北海道第1

14 廣福寺 様
37 法徳寺 様
63 全修寺 様
90 含笑寺 様
96 観音寺 様
356 大聖寺 様
504 達磨寺 様
510 禅燈寺 様

◆北海道第2

102 興禅寺 様
117 中央院 様
239 禅昌寺 様
241 孝徳寺 様
299 永福寺 様

◆北海道第3

460 道貫寺 様



『アプリソウセイ』 3月1日公開！ (iOS、アンドロイド対応アプリ)

全国曹洞宗青年会ではこのたび、公式アプリ『アプリソウセイ』を配信いたします。私たち青年僧侶に有意義な情報を直接お届けしたいとの思いから開発いたしました。無料にてダウンロードいただけるよう、3月1日の公開に向け準備を進めております。ぜひ情報の収集や法務に、また青年会員同士の情報共有にお役立てください。



メイン起動画面

行事開催告知など HP『般若』の最新情報

全 曹青HP『般若』にて更新された記事をスマホにて閲覧できます。これまで見逃してしまっていた行事報告や気になるイベント情報、そして加盟曹青会からのお知らせなどを、見やすく気軽にご覧いただけます。全曹青の活動をより身近に感じられることでしょう！

連 災害復興支援部メールマガジンバックナンバー
絡協議体としてのメリットを活かし、災害発生時に全国の各加盟団体や社会福祉協議会と協働し情報発信を行う「災害復興支援部メールマガジン」を閲覧できます。



広報誌『SOUSEI』バックナンバー

広報誌『SOUSEI』 バックナンバー

発 行された誌面そのままの内容で、PDFデータ化された全国曹洞宗青年会広報誌『SOUSEI』のバックナンバーをご覧いただけます。過去に掲載された気になる記事、場所を選ばずに閲覧することができます。



法要公務帳

寺院法要の進退確認に役立つ 「法要公務帳」

行 持軌範に則り編集した「本尊上供」と「晋山結制」を収録します。差定別・配役別にわかりやすくなっており、僧侶が実践で直面する問題を解決してくれます。静止画や図解の他、アプリだからこそできる動画も収録されており、活用しやすい内容となっています。



連載 伝え方のデザイン

第6回

インターネットの活用の仕方

曹洞宗八屋山普門寺副住職

吉村昇洋

今さら言うまでもなく、現代はインターネット社会である。90年代半ば以降、世界中で急速にIT技術が発展し、「IT革命」という産業革命以来の社会構造を大きく揺るがす本物の「革命」が起こった。

以前であれば、布教師として活動をしていない一般僧侶の声は、自分のお寺に属する檀信徒及び地域をその範囲としていたが、今や日本全国に留まらず、全世界にまで自分の声を届けることが可能になった。これはとてつもない社会構造の変化であるにもかかわらず、我われはその渦中にいるため変化の実感はしにくい。一方、私の場合、地方寺院のしがな一僧侶の立場ながら、本を書いたり、講演で全国を飛び回ったりさせてもらっているのは、IT革命のおかげであるとはっきり言える。というのも、こうした時代の波に乗った形で、2005年から宗派を超えた若手僧侶たちが運営するweb寺院「彼岸寺」に参加し、精進料理の「禅僧の台所」を開始したことがきっかけだったからだ。

彼岸寺は今でこそ1日に3,000人ほどが

訪れる人気サイトだが、当初は皆手探り状態の極めて小さい存在だった。周囲を見渡せば各寺院がホームページを立ち上げ、情報を公開するような取り組みがあったものの、若手僧侶たちが等身大の自分をさらけ出して仏教を伝えるようなメディアは、目立ったものでは『ほぼ日刊イトイ新聞』で連載をしていた白川密成さんの「坊さん」の他には見あたらなかったと記憶している。

彼岸寺に寄稿し始める前、私は永平寺での修行を終え、地元広島ではなく東京で生活をしていった。その頃、東京工業大学の上田紀行教授(当時は准教授)を中心としたボーズ・ビー・アンビシャス(通称・BBA)という、宗派を超えた僧侶たちが全国から集まる勉強会の運営に携わっており、僧侶として生きていく中で自分に何が出来るかを模索していた。そして、その会に参加し続けていたことで、全国の多くの活発なお坊さんたちと有機的につながり、ぼんやりとだが、自分の進むべき目標も見つかった。

それは、「自分が仏道実践で感じた面白さを他者に伝える」こと。私自身が救われた仏教の考え方や実践内容を知ってもらうことで、檀信徒を始めとする多くの人びとにも私の体験をお裾分けできるのではないかと考えた結果だった。しかし、あくまでも「ぼんやり」としか見えていないので、具体的な方法が分からない。そんな時にBBAのつながりで彼岸寺を紹介され、渡りに船を得ることとなった。

彼岸寺では、精進料理のレシピやコラムの他に、仏教マンガの研究、仏教書の書評、仏

教イベント評など多岐に亘る文章を書かせてもらっているが、私が大切にしているのは、禅仏教を伝えるという一本のブレない軸を持つて書くということである。

彼岸寺の運営メンバーとの話でいつも語られるのは、いくら高度な情報伝達のツールを持つていても、伝える仏教的な軸と内容がなければ意味がないという認識だ。当たり前のことながら、皆がこの認識を強くもっている。超宗派の集まりであっても自然と切磋琢磨することとなり、ある種の清浄さを伴った緊張感が共有される。読者は「執筆者が本気で仏教と向き合っているかどうか」について文章の中から敏感に察知し、信頼に値するか否かを判断するので、こうした雰囲気は書き手にとってかなり重要である。

FacebookやTwitterなどのSNSがコミュニケーションツールとして多用されるように、全世界に向けて容易に発信できる時代だからこそ、僧侶としてふさわしい立ち居振る舞い、また仏教について真摯に学び参究する姿勢が求められる。考えてみれば、時代に関係なく仏教者の前提とも言うべきことなのだが、それを常に実現できている者はほんの一握りであろう。自分自身を顧みても、そう在りたいと努力はしつつも、そのように出来ていない現実を身を苛まれることは日常茶飯事だ。

仏道実践は、自己の至らなさがあるがままに受け止め反省する「懺悔」と、仏の生き方を願う「誓願」の繰り返しの中で行われるが、この基本姿勢の上に全ての僧侶の活動が成立していることを忘れてはならない。

総合御寺院用仏具専門店
株式会社 七福商事
☎ 0943-32-5103

西日本 丸太屋佛具店 ☎ 0943-32-4036
東日本 福祿堂佛具店 ☎ 0120-77-2969

ホームページ <http://www.sichifuku.jp>
本社・工場・展示場 〒834-0111 福岡県八女郡広川町日吉 1407
関東営業所 〒347-0063 埼玉県加須市久下4丁目 1-2



心をかたちに 感動の旅!

ビーエス・グループ会

〔幹事〕東京本社

〒105-0004 東京都港区新橋三丁目2-7 恭和ビル2F
TEL (03) 3502-4041 FAX (03) 3502-5416

僧侶の英会話 ～お寺で使えるフレーズ集～ 作成のお知らせ

日本語を話せない外国の方がお寺に来られたら……

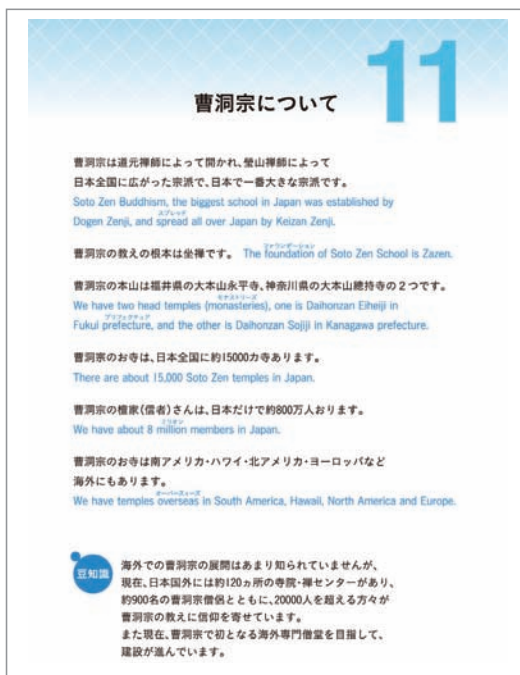
「どうしよう!!」

近年、多くの外国からの観光客が日本を訪れるようになりました。そんな中、最近では観光ガイド本に載っている寺院のみならず、様々な寺院へも外国人観光客の参拝がお越しになる機会が年々増加しております。せっかく日本に来たのだから、お寺の中を観てみたい、坐禅をしてみたい、仏教の事を知りたいなど、お寺に対し興味をお持ちの方は多くおられます。しかしながら、英会話に自信がないのに安易にお迎えするのは、やはり抵抗があると思います。

そこで今回、英会話に自信のない方でも基本的な寺院説明を簡単に出来る、マニュアル本を作成しております。お出迎えに始まり、本堂内の説明、開山堂や位牌堂、坐禅の仕方など、そしてお見送りまでをどのように英語で対応すればよいのか、時系列に沿って紹介していきます。

この本は、単に「見せてコミュニケーションを図る」のが目的ではなく、向上心を持って実際に英語を話していただき、より良き国際交流の一助としていただければ幸いです。

※現在作成中につき、内容は一部変更になる可能性があります。



正式名 : 僧侶の英会話 ～お寺で使えるフレーズ集～
内容 : 32ページ(カラー)
頒布価格 : 未定
頒布開始日 : 春頃
発行 : 全国曹洞宗青年会

【目次】

1. 基本的な日常表現	8. 墓地と供養
2. お出迎え	9. 坐禅作法
3. お見送り	10. 仏教について
4. 寺院の説明	11. 曹洞宗について
5. 本堂	12. よくある質問と回答例
6. 開山堂と位牌堂	13. 単語集
7. 境内について	

編集後記

本年も宜しくお願いたします。
現代はとても便利な世の中になっています。パソコン、携帯電話を見てもここ数年でめまぐるしい進化をしております。
携帯電話は電話機能だけではなく、最新ニュースを見たり、翻訳できたり、地図を見て現在地が確認できたり、様々な事ができるようになりました。近日、全国曹洞宗青年会からアプリが公開されます。法要公務帳、『SOUSEI』バックナンバーなど、見たい時にすぐ見られるとても便利なものになるのでとても楽しみです。
昨今、どんどん便利になるのはいい事ですが、新しく覚えなければならない事も多いので、常に新しいことにチャレンジして行く事が青年僧侶の強みなのかなと思えました。

文/広報委員 長尾大乘

全日本仏教青年会

平成28年12月6日、東京都文京区の真言宗豊山派大本山護国寺様を会場に、全日本仏教青年会(以下、全日仏青)の第2回臨時理事会が開催されました。
この会議の中で次期第21代理事長の推戴審議も行われ、全日仏青の次期理事長に全国曹洞宗青年会(以下、全曹青)の倉島隆行次期会長(現、副会長)が推薦され、満場一致で推戴されることが決定いたしました。倉島副会長は、既に就任している世界仏教徒青年連盟(WFBY)の青少年教会委員会副委員長に加え、全曹青会長、全日仏青理事長を兼任することとなります。
既にWFBYに村山博雅会長代行、松岡広也アドバイザーを送り出している全国曹洞宗青年会は、倉島次期会長の全日仏青理事長就任により、世界の若き仏教徒との交流や情報発信に加え、日本の各宗派の青年僧侶の結束を促し、現代の諸問題に対応していく責務を担います。
関係各位のより一層のご協力を、宜しくお願申し上げます。